
かんばらむら
鎌原村
ふくちゃん家族
かぞく
てんめいさんねん
～天明三年のお話～
はなし

ふくちゃんはおじいちゃんから田植えを通して天明三年の話を聞きます。浅間山が大きな噴火をして、住んでいる鎌原が埋まってしまったことを知ります。また、おばあちゃんからは今も和讃を唱え続けていること教えてもらいます。ふだん浅間山から自然の恵みをたくさん受けています。ふくちゃんは自然をよく知り、共に生きていくことのたいせつさを感じていきます。



ミライの子どもたちへ語りツナグ本



鎌原村(かんばらむら)ふくちゃん家族(かぞく)

～天明三年(てんめいさんねん)のお話(はなし)～

文　みやざき　みつお

絵　さとう　みき

鎌原村ふくちゃん家族

ー天明三年のお話ー

ふくちゃんが住む嬬恋村鎌原から浅間山がよく見えます。ふくちゃんは小学校四年生の女の子です。朝起きて、部屋のカーテンを開けると目の前に浅間山が見えます。

かならず浅間山に向かって

「おはよう、今日も元気でがんばろう。」

と声かけをしてから顔を洗いに部屋を出ます。



お母さんのさちさんがキッチンでキャベツの千切りをしながら朝ご飯の用意をしています。

お父さんのあさおさんが

「今日は田んぼで苗植えをするぞ。ほうじいちゃんもわさばあちゃんもふくもかんも手伝うんだぞ。」

と朝ご飯のテーブルにつくと言いました。弟のかんくんが大きな声で

「うん、手伝う。おたまじゃくしと遊ぶ。」

と言いました。お母さんが

「じゃ、こじはんにおいしいおむすびを作ってもっていこう。」

と言いました。

※こじはんとは、農作業で疲れたり、お腹がすいたりしたときに腰を下ろして休み、水を飲んだり、おやつを食べたりして疲れを取ることです。

ふくちゃんの家の田んぼは、浅間山はもちろん四阿山、草津本白根山が見え、三百六十度の景色が楽しめるところにあります。この山々は日本百名山になっています。

田んぼに着くとお父さんが苗を渡してくれました。家族みんなでどろんこになりながら苗植えを始めました。





一時間半ぐらい過ぎたあと、かんくんが
「このおたまじゃくしは、足がはえている。はやくてつかまえられない。」
とおたまじゃくしを追いはじめました。

お母さんが
「みんな疲れたでしょう。ひと休みしましょう。」
と言いました。するとわさおばあちゃんが
「こじはん石で休もう。お母さんの作ったおいしいおむすびをみんなで食べよう。」
と言いました。みんなは苗を田んぼのあぜ近くに置くと大きなこじはん石に登って休みました。

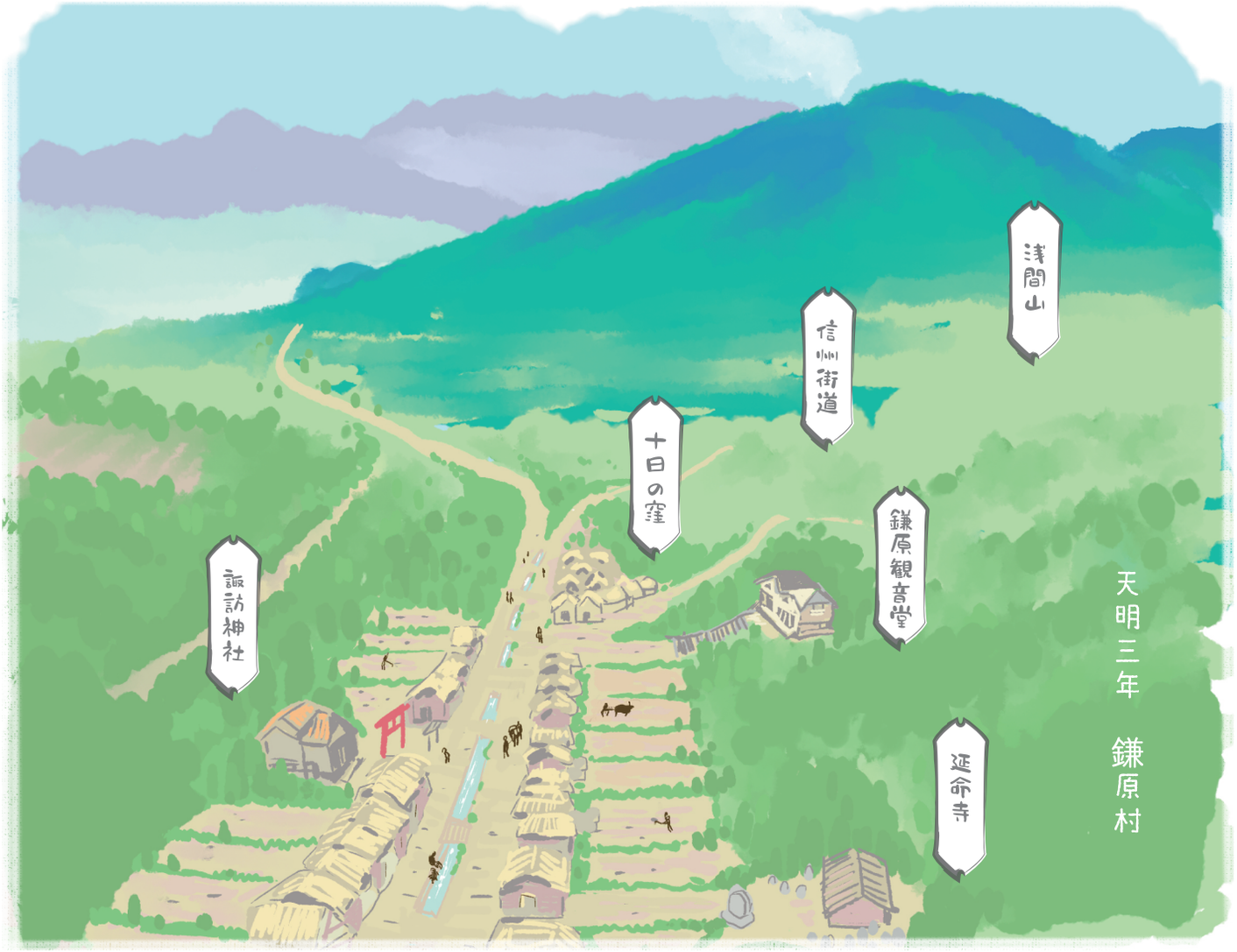
ほうおじいちゃんがおむすびを食べながら
「鎌原のお米はおいしいね。どうしておいしいのかわかるかい。」
とふくちゃんに問いかけました。

「家族みんなでなかよく作っているからだよ。」
と答えました。

「そのとおりだ。でもね。昔はお米が鎌原では穫れなかったんだよ。この座っている石のいわれを知っているかい。」
と言いながらほうおじいちゃんは天明三（一七八三）年の鎌原の話を始めました。

ふくちゃん豆知識

鎌原米は、とてもおいしいお米です。国際コンクールで金賞や特別賞を取り続けています。
天明３年の土石なだれで埋まった大地から穫れています。



「鎌原は、天明三年の江戸時代には、信州街道という大きな道が鎌原村を通っていた。高崎や軽井沢から鎌原に来て、草津温泉や長野の善光寺へ行く人たちでにぎわっていたんだよ。村の大通りには、鎌原用水が流れていて、馬が水を飲んだり、休んだりしていた。もちろん人もこの水を飲んだ。鎌原の人たちは、この水で料理をしたり、洗濯をしたりする生活の水だ。水道のない時代だ。鎌原は、浅間山のふもとの西吾妻地域で一番大きな村で五百七十人が住む宿場の村だったんだ。馬もたくさん飼っていて、お客さんの荷物を運ぶ駄賃稼ぎをしたり、蚕を飼ったりして生活をしていた。」

ほうおじいちゃんは、お茶を一口飲むとまた話し出しました。

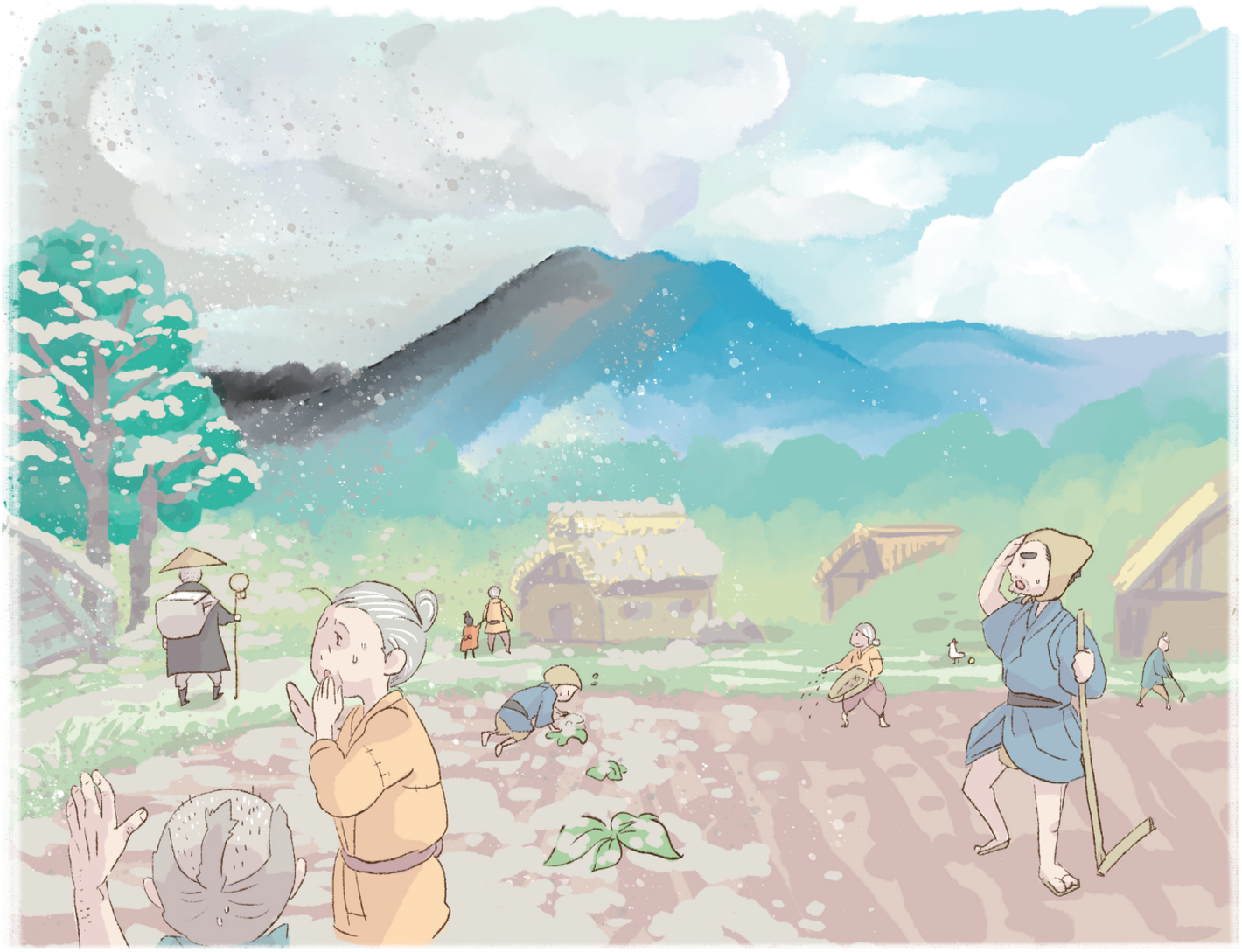
「見えている浅間山は、大昔から煙をはいている山なんだ。天明三年にこれまでにはなかった大きなことが起ったんだ。五月九日に浅間山がはねた。

※噴火することを鎌原では、はねるという。

ふん煙を上げて火山灰を遠くまで降らせた。桑の葉や作物に灰が積もってしまったので払い落とした。洗い落とさないと蚕にあげたり、食べたりすることはできなくなった。でも、浅間山はよく噴火する山なので驚かなかった。

ふくちゃん豆知識

お地蔵さんと馬頭観音が観音堂境内にあります。天明噴火災害で馬が１６５頭亡くなっています。馬を供養した石像が見られます。



一ヶ月ぐらいした後、また浅間山がはねたんだ。やはり火山灰をたくさん降らせた。作物に積もった灰を払い落としたり、水で流し落としたりした。また、半月もしないうちに浅間山がはねた。鎌原の人たちもよく噴火するなと思い始めた。七月の下旬になると毎日のようにはねた。さすがに心配をし始めた。

八月三日、四日は大きな噴火があり、火口から火砕流が流れ出し、溶岩樹型という珍しいものを作った。

※この火砕流のことを吾妻火砕流という。

あまりにも噴火をするので、鎌原にあった延命寺の和尚さんが、数人のお百姓さんと共に噴火をしないようお願いするために浅間山に登った。そのまま帰って来なかったという。

八月五日の朝は、青空が出てきたので、鎌原の人々は体を休めていた。すると、とても大きな噴火が地響きと共に起った。十時過ぎの出来事だった。今までとは違ってとても大きな噴火だったんで、慌てて家から飛び出し、遠いところや高台に逃げた。

後ろを振り返ってみると、小熊沢の方から土石なだれが黒煙とともに時速百キロ以上の凄い速さと勢いで流れ下ってくる様子が見えた。

ふくちゃん豆知識

しなの木があります。この木の皮を使って縄にして生活に使っていました。
この木の実は、クルクルと回って舞い落ちます。



より遠くへと北に逃げた人は土石なだれに飲み込まれた。観音堂の石段を登り高台に逃げ延びた人は助かった。

石段のところまで来たおばあちゃんを背負った四十歳ぐらいの女の人は石段に足をかけたところで土石なだれで埋まってしまった。観音堂に登りあがった人たちは、『そこまで土石なだれがきているぞ。早く上がれ。』と声をかけたが助からなかった。自分の家があった方を見ると家が土石なだれに飲み込まれていく様子が見えた。東の方のこんもりとした高台にあった諏訪神社もだ。今の鎌原神社のところだ。馬や牛もみな飲み込まれ、流された。ありとあらゆるものが流された。または、土石の中に埋まってしまった。

あたりを見まわしてみると残った建物は、鎌原観音堂だけだ。あとは何も残っていなかった。畑は流され、埋まり何も残らなかった。あるのは流れてきた土石だけだ。助かった人の数を数えてみると九十三人だけだった。」

ほうおじいちゃんはおむすびをひとかじりするとまた話し出した。お父さんもお母さんもかんくんもき聞き入っていた。



「助かった九十三人の話だが、流されたり、埋まったりして家族みんながばらばらになってしまった。子どもだけになってしまった家族、お年寄りだけになってしまった家族、お父さんかお母さんが亡くなってしまった家族ばかりになってしまった。夜になった。食べるものは何もなく、寝るところは鎌原観音堂だけだ。狭くて、そこに九十三人全員寝ることはできない。ふくがもし九十三人の中の子どもだけになってしまった家族だったらどうする。」

と、ほうおじいちゃんは問いかけてきました。

ふくは考えてみました。大好きなお母さんやお父さんがいなくなることは想像できませんでした。

するとほうおじいちゃんは、

「むずかしいよな。九十三人はその中で全員生き抜いたんだよ。大笹村の名主で問屋の黒岩長左衛門さんや干俣村の干川小兵衛さん達が中心になって、その日の夕方から炊き出しをしてくれた。自分のお金を出し、お米を買いおにぎりやお粥を出してくれた。また、急ごしらえの大きな家を二軒建ててくれた。隣の村が困っていると隣の村が支えてくれたんだ。」

ほうおじいちゃんは、一息つくとまた話し出した。



「土石なだれはな。鎌原を埋め、流れた。小宿や芦生田の家々や人をも押し流して吾妻川に入った。吾妻川に入ると川をせき止め、川が反対に流れ出して被害を大きくした。そして、せき止めた土石は、破れて洪水を起して流れ下った。

雲林寺のある長野原町では二百人もの多くの方が亡くなった。ＪＲ吾妻線の金島駅近くに天明三年の大きな浅間石が流れ着いている。そこでは、百十三人が亡くなっている。

吾妻川は、渋川で利根川に合わさり、玉村町五料で烏川と合わさる。その近くに伊勢崎市戸谷塚というところがある。そこでは亡くなった人が七百人ほど流れ着いたといわれている。戸谷塚の人が、亡くなった方の供養ために地蔵さんを建ててくれた。

千葉県の関宿で利根川と江戸川に分かれ泥流は流れ下った。銚子の東庄町には亡くなった人が流れ着いている。禅定院というお寺に供養塔がある。もうすぐ太平洋だ。太平洋まで流れ出ているかもしれない。江戸川でも寅さんで有名な東京柴又帝釈天や善養寺に大きな供養塔が建っている。江戸川を渡るとみんなの好きな東京ディズニーランドがあるところだ。ふくも東京ディズニーランドに行ったことがあるよな。そこまで流れ下った。



鎌原では死者は、四百七十七人、全体で千五百人ほどのたくさんの人が亡くなっている。家を流されたり、けがをしたりした被災者の数は何万人にもなった。すごい数だな。

当時のことが書かれている江戸、東京の古文書の中に『昼間でもあかりを灯さないと暮らせなかった。』と書いてある。なぜ、昼が夜になってしまったかだ。

浅間山が噴火をして、火山灰をたくさん降らせて太陽を隠してしまい、暗い夜になってしまったのだ。火山灰は、成層圏まで達し、灰はなかなか落ちてこなかった。上空を灰が漂い、よく年には、灰が太陽を隠すことになる。気温が下がり寒くなり、気候が悪くなった。日本全国で作物が育たず、食べ物がなくなり飢えて死ぬ人が大勢出た。飢饉になった。

この飢饉のことを天明の飢饉と言うんだよ。浅間山の噴火は天明の飢饉を大きくした。政治をとっていた老中田沼意次は、その二年後に辞めさせられてしまった。」

「天明三年の噴火はたいへんな噴火だったんだ。鎌原は全部流されたり、埋まったりしたんだね。」

とふくちゃんが言いました。

「そのあと、浅間山は、上毛かるたに読まれている『浅間のいたずら鬼の押し出し』の鬼押し出し溶岩が流れ出し、噴火がおさまっていく。天明三年八月五日の噴火が大きな噴火の最後だった。復興の為幕府から勘定吟味役根岸九郎左衛門が噴火から三十日後に鎌原村に来たんだ。鎌原は、天領、つまり幕府領だったので幕府を中心とした復興がそこから始まったんだ。話は、ここまでにするか。」

とほうおじいちゃんがいうと、ふくちゃんは、

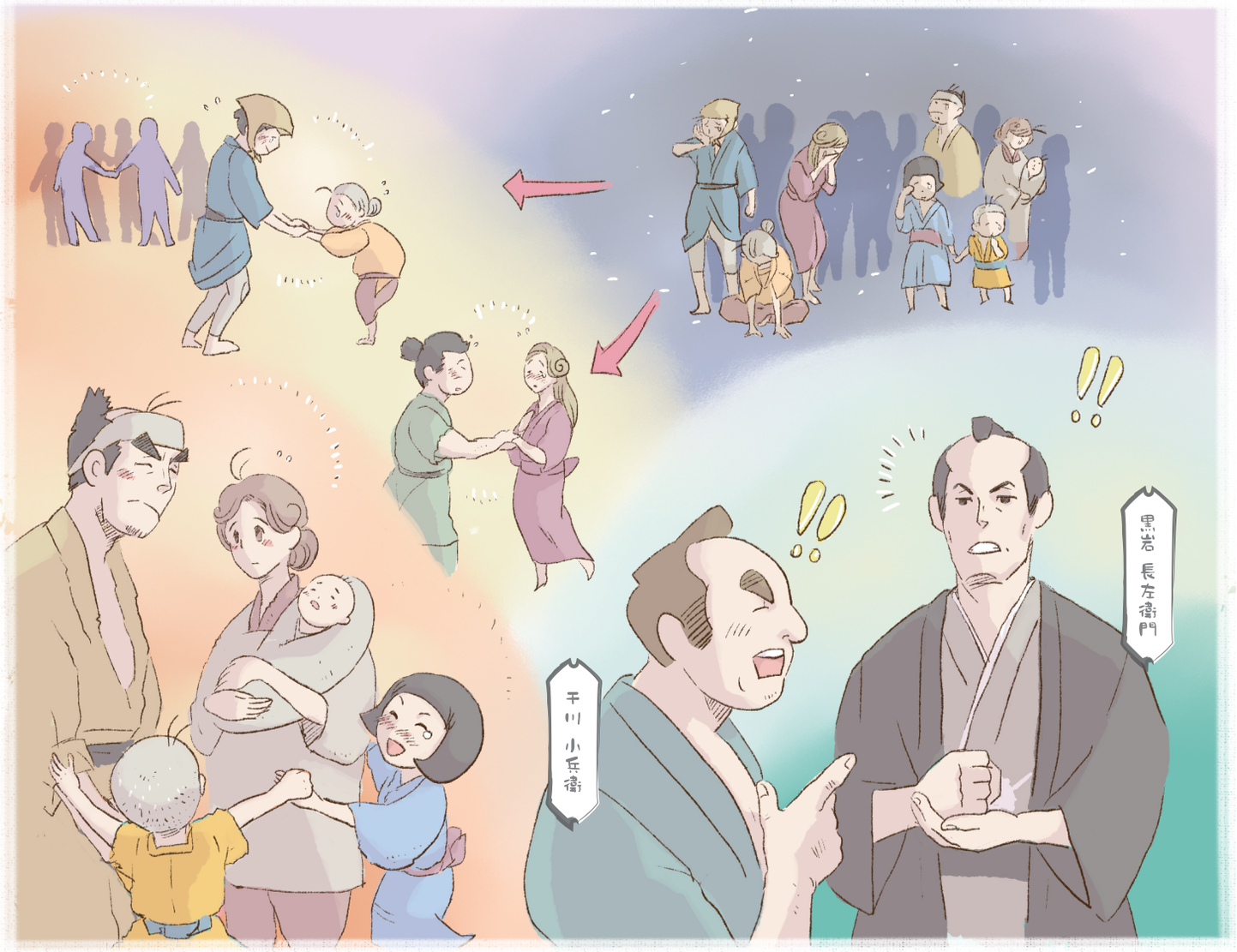
「もう少し話して。」

とせがみました。



「じゃあ、もう少し話すとするか。復興にはお金がかかる。幕府にはお金がなく、その復興資金を外様大名である熊本藩の細川家のお殿様に命じて出させた。熊本藩もお金がなく、熊本の住民から寸志金（寄付金）を集めた。そのお金で鎌原を始め被害のあった村が復興していく。復興するにあたって、子どもだけになってしまった家族、お年寄りだけになってしまった家族、お父さんかお母さんが亡くなってしまった家族ばかりだった。そのような家族をどう立て直すかが大問題だったんだ。





大笹の名主の黒岩長左衛門さんと千俣村の千川小兵衛さんは相談にのり、画期的な家族を考え出した。江戸時代だから身分制度があったんだ。お百姓さん同士でも身分が違うとその家の玄関に入れないような時代であった。その身分制度をなくして、みな平等にしてしまった。どうのようにしたのかな。わかるか。」

時間をおいて、ほうおじいちゃんは話し出した。

「九十三人全員を一つの家族にした。つまり九十三人を一かたまりの家族にしてしまったのだ。家族のちぎりを結んで、それをもとに、子どもだけになった家族には子どもをなくした親をつける。老人だけになった家族には青年をつけていく。夫を亡くした妻には、妻を亡くした夫と、妻をなくした夫は、夫をなくした妻と一緒になって家族を作り直した。本来なら血のつながった家族がよいのに決まっている。そのような家族が出来なかったのだ。知恵を出し合って新しい家族を作って、再出発をしたんだ。

災害のあった天明三年の暮れには十一軒の家族ができて、村づくりが始まった。

鎌原村の開発場（けいほつば）は、幕府が采配を振って復興事業に取り組んだ場所だ。その名前を聞いたことあるかな。

ふくちゃん豆知識

鎌原の道を歩くと赤く塗られた板が目に入ります。火事になったときに鎌原用水の水を止め、消火するように備えられている板です。昔、鎌原用水は村の道の真ん中を流れていました。今は、道路の脇を流れています。



村の人々は、土石なだれの土地で作物が作れなかった。食べ物がなくたいへん不自由した。大笹村の名主問屋黒岩長左衛門さんは、そのひさんさを見て考えた。

そうだ鬼押し出し溶岩が流れ止まったところに温泉が湧き出ている。大笹まで温泉を引っ張てきて温泉宿を造ることにしよう。温泉を引くには、土木工事をする人足がいる。働いた人に賃金を払うことにすれば、災害を受けた鎌原の人は助かるにちがいない。

仕事についてもらえれば、荒れている土地で、作物が育たなくとも賃金を得ることができる。災害を受けた人はそのお金で生活をすることができるはずだ。

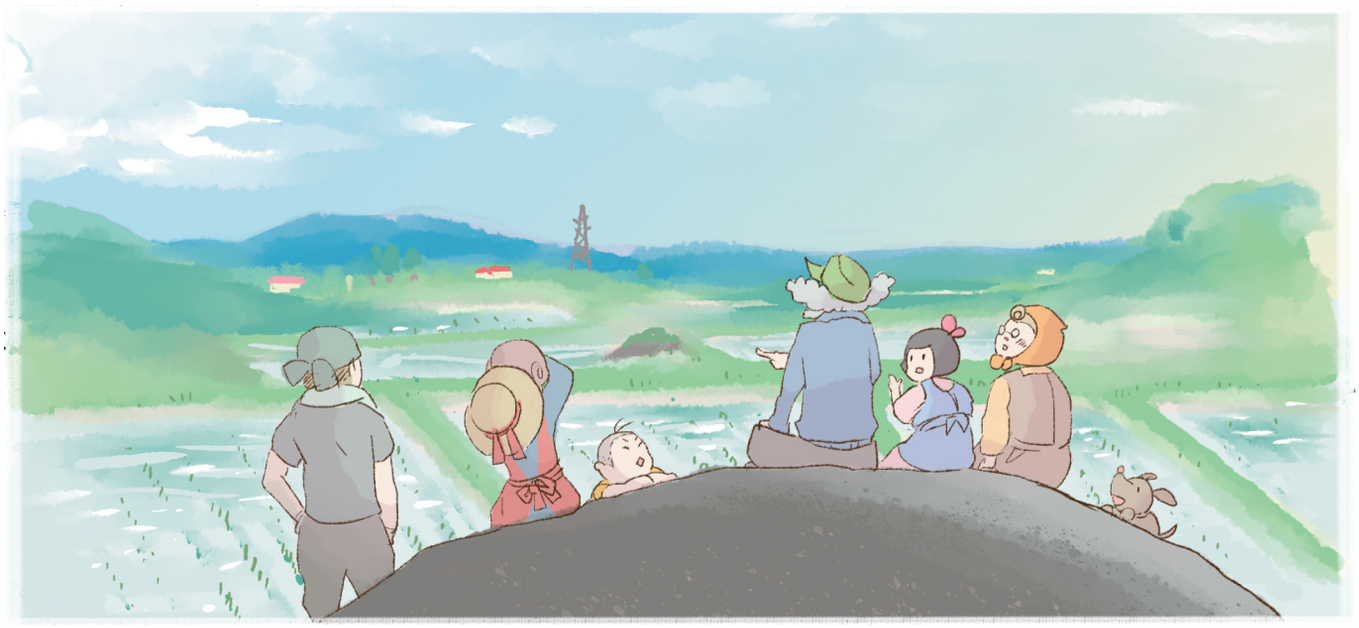
この工事のお金は黒岩長左衛門さんが自ら出した。人助けの湯の工事だったんだ。

鎌原は、そういう所なんだよ。

このこじはん石は、天明三年の土石なだれの上にこの石がのってきたんだよ。田んぼを見てごらん。あの大きな石はホタル石だ。このこじはん石と同じで黒いだろう。ところどころに同じ石があるね。全部その時に流れてきた天明三年の浅間石だ。こじはん石は、座って休むのにもってこいの石なんだ。もう二百数十年以上もこの石がここにあるんだよ。じいちゃんのじいちゃんもこの石で休んだ。」

ふくちゃん豆知識

鎌原神社の入口に郷倉があります。天明の噴火から5年後に建てられました。飢饉になったときに備えて食料を貯めておく倉です。映画「男はつらいよ寅次郎ハイビスカスの花」で寅さんがこの中で寝ていました。



「こじはん石のいわれや名前の意味も分かった。友だちにも今度教えようかな。」

とふくちゃんは思いました。

ほうおじいちゃんはお茶を飲み干すと服についているゴミをはたき落としながら、

「もう一踏ん張り頑張ろうや。」

と、言いながら田んぼの中に足を踏み入れました。

おばあちゃんが、ふくちゃんに

「苗植えが終わったあと家に帰りながら浅間山噴火大和讃について話して聞かせてやるよ。」

と苗を植えながら話しかけてきました。

ふくちゃんは

「和讃って、なんだろう。」

と思いました。かねをならして唱えているのがあるな。そのことかなと想像しました。

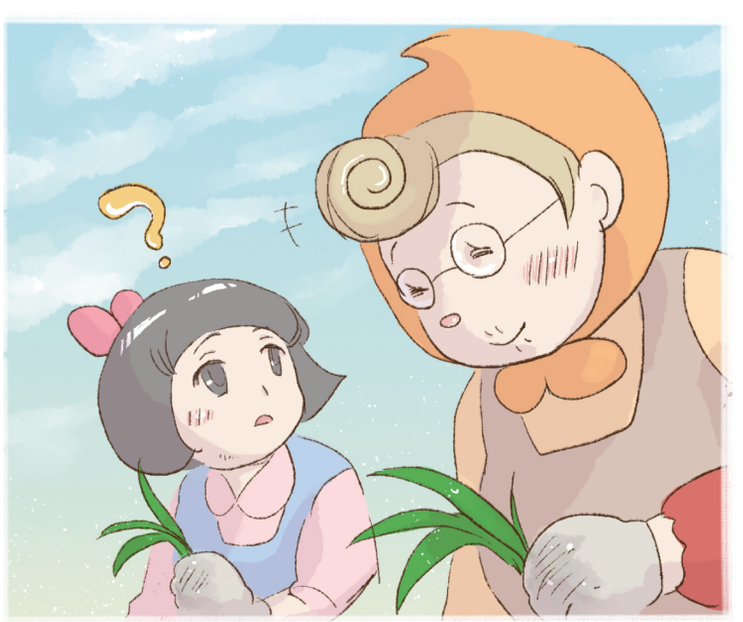
一時間半ぐらいたったらお父さんが

「みんな、よく苗を植えてくれた。今年もおいしいお米がとれるぞ。ありがとう。」

と言ってくれました。

弟のかんくんは「手伝い終わったぞ。」といういっぱしの泥のついた顔をしていました。

防災無線からお昼の『雪山讃歌』の曲が流れてきました。家族みんなで協力しながら植えたのでお昼の十二時には終わりました。



ふくちゃんとわさおばあちゃんは、歩いて家に帰りました。わさおばあちゃんはふくちゃんに語りかけ始めました。

「生き残った九十二人の子孫の滝沢対吉さんが天明の被害から八十五年後の明治はじめに浅間山噴火大和讃を編集したんだよ。対吉さんは、自分のおじいちゃんや多くの鎌原村の人から天明三年のことを聞いたり、教えてもらったりしたことをもとに和讃を作った。



もしかするとこの和讃の元があって、作り直して村の方々が唱えやすいようにしてくれたのかもしれない。とにかく百五十年以上も前に浅間山噴火大和讃は、今、おばあちゃんたちが唱えている和讃になったんだ。

おばあちゃんが和讃を唱えているまわり念仏は、昔からずうっと月二回、月の七日と十六日にしてきている。今は多目的センターでしているが、昔は、村の中を一軒一軒回ってしていたんだ。時計回りに順番に家々をまわってしていた。当番がまわってきたら家の中を掃除して会場を作り、お茶の用意をしたもんだ。

向かって左に亡くなった四百七十七名の名前と年齢が書かれた掛軸、真ん中に十三仏さん、右側には弘法大師を掛ける。おばあちゃんの若い頃はまわり念仏を夜唱えていたんだ。それが昼間一日になった。

それから、唱える念仏を選び抜いて午後半日だけになってきたんだ。十三時から十五時半までの半日、和讃を唱えている。毎回二十名ほどの和讃会のおばあちゃんが集まってきている。（平成三十年五月現在）

ふくちゃん豆知識

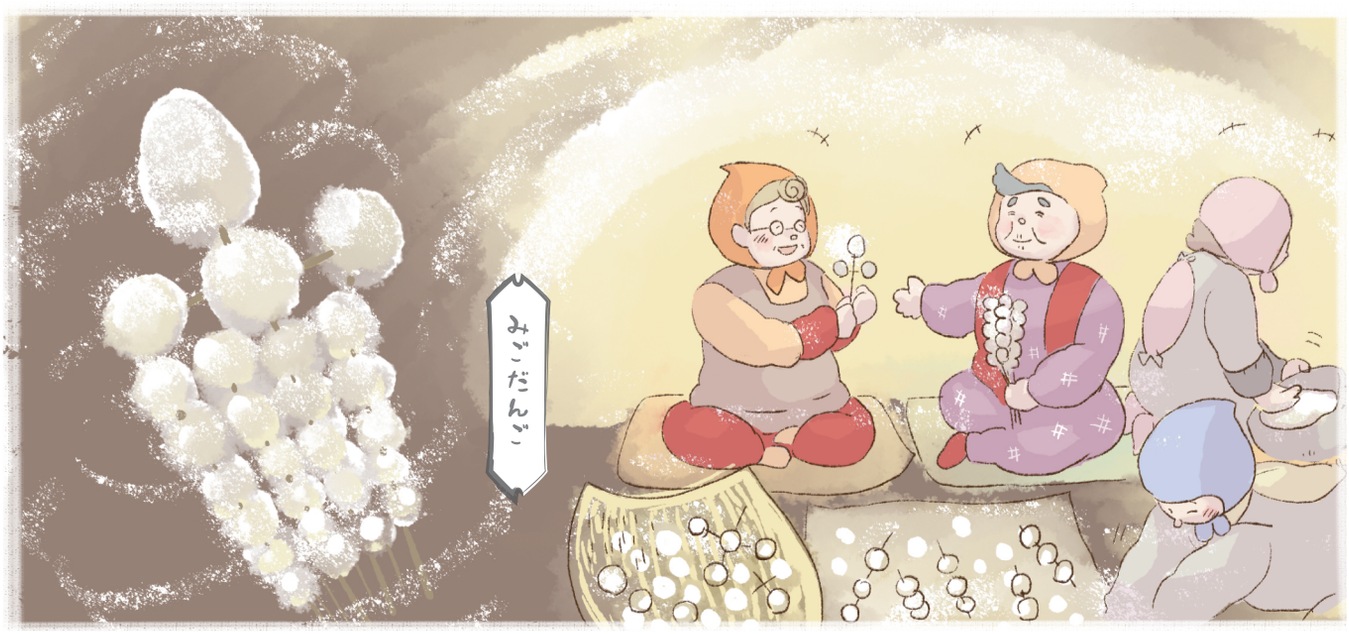
「かんぱらきゅうり」が夏になると穫れます。おいしいので鎌原の家々ではこのきゅうりを育てて食べています。お店ではあまり売られていない鎌原の地元のきゅうりです。

浅間山噴火大和讃、戸谷塚和讃、善養寺和讃は、後半十四時半過ぎに唱える。それまでは、般若心経や念仏を唱えている。なあ、ふくちゃんや、今度おばあちゃんと多目的センターにいって和讃を聞いてみようか。」

と、誘いの言葉をかけてきました。急に思いついたかのようにそうおばあちゃんは、話をつけたしました。

「そうそう、みご団子の話もしておこう。春の彼岸の入りにみご団子づくりをしている団子のことだ。この団子は、観音堂に集まってみんなで作るんだ。団子を一つずつ串に六つ刺し、その串を六つわらで作った束に巻き付ける。その上に人のようなだんごを作りのせるんだよ。めずらしい形だよ。このような団子を作っているところや地域をおばあちゃんは見たことがないよ。鎌原でしか作っていない団子だと思う。それを観音さまにお供えする。須弥壇いっぱいにすみからすみまで供える。それはそれはみごとなもんだよ。半日かけて作る。みご団子をお供えし終えるとお堂の中で浅間山噴火大和讃をおばあちゃんたちみんなで唱える。それでみごだんごづくりは終わりだ。

彼岸には、男の人たちは観音堂でおこもりをする。昔は、彼岸の間中、泊まっておこもりした。今は、夜の八時ぐらいまでおこもりしている。

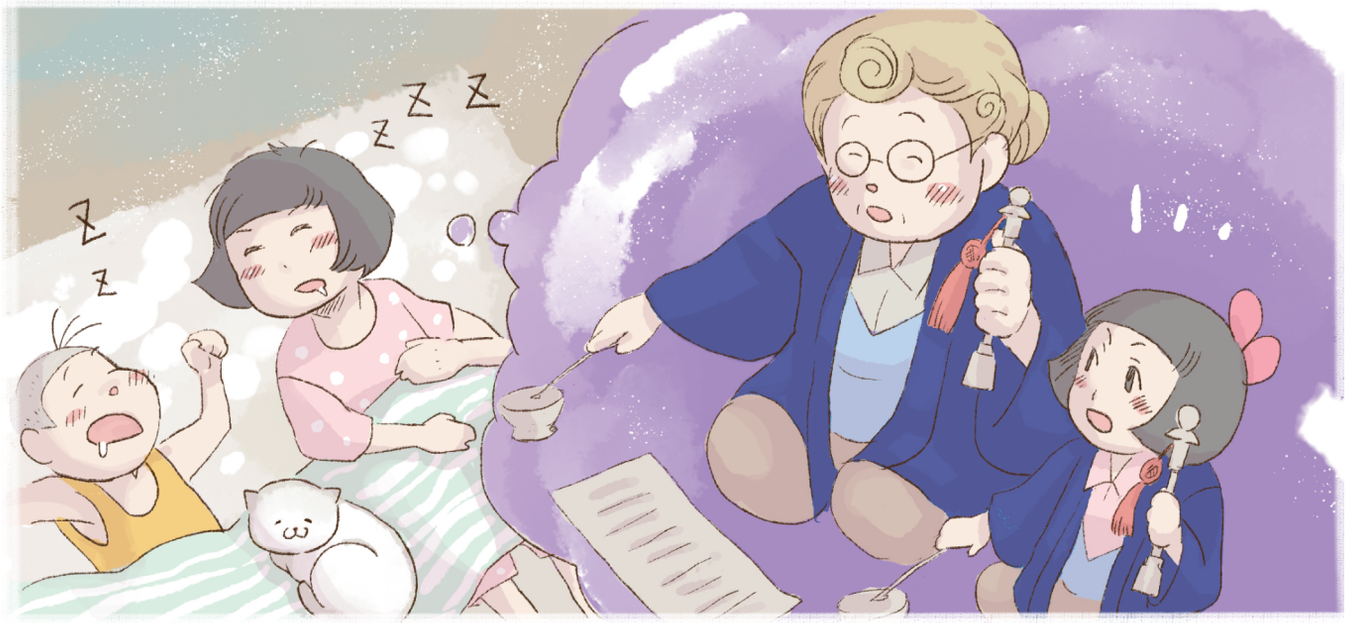


みご団子のいわれはな。浅間山噴火大和讃にあるように『妻なき人の妻になり、主なき人の主になり・・・』結婚式をあげるのに何もないので、みそをつけた団子をとなり村の方がもってきてくれて祝ってくれたんだ。これが鎌原の村人たちの身を守ることにもなったんだ。それで身護団子というようになった。

それからな。八月五日の命日の供養祭は、毎年鎌原観音堂でしている。午後一時半に鎌原獅子が舞ってから始まる。会場は二百回忌の観音さまの前にテントを建てて行う。戸谷塚や中島の方もみえるんだよ。もちろん戸谷塚や中島の方と一緒に浅間山噴火大和讃も唱えている。

秋の彼岸の念仏はな。彼岸の中日に観音堂で浅間山噴火大和讃を唱えている。またな、旧暦の十月十日の前日には、伊勢崎市戸谷塚、伊勢崎市境中島供養祭に出かけていって、浅間山噴火大和讃などを地区の方と共に唱えている。

鎌原の人はな。ここの地に住み、ごく当然のこととして和讃を唱えてきている。和讃は鎌原の歴史と文化になっている。私たちの亡くなった先祖を思い、また、その埋まった土地に暮らさせていただいていることに感謝し、供養をしているだよ。」



ふくちゃんは、わさおばあちゃんが多目的センターで和讃を唱えているところが見たくなりました。

「友だちをさそっていこう。」

と思いました。

家に着きました。わさおばあちゃんは手で服の泥をパタパタと落として、手や足を水できれいに洗いました。ふくちゃんも目の前に見える浅間山を見ながらおばあちゃんに続いて同じようにきれいにしました。

お母さんがお昼ご飯を用意してくれました。腹がすいていたので家族みんなでたらふく食べました。鎌原のお米はやはりおいしいです。

みんな疲れていたので、食べ終わるとお昼寝タイムになりました。

ふくちゃんは夕方、犬の散歩に出ました。畑のある方向の道を行くことにしました。

鎌原の畑や田んぼを見ると広くて平らです。でも畑には、小石がたくさんあります。もちろんふくちゃんの家の畑も同じです。よく鎌原の人は、鍬や草かきの刃がへるといいます。小石があるのですり減ってしまうのです。





なぜかというと鎌原は五～六ｍ土石で埋まっているので、小石を取ってもとっても出てくるのです。どけた石を畑の脇の境に積んで置きます。それを見ると土地を平等にわけたことが分かります。天明三年の復興をするときに平等にした十間幅の短冊状の畑が見えてきます。ふくちゃんの畑もそのようになっています。その畑でキャベツや鎌原きゅうりなどのおいしい高原野菜が穫れます。ほうおじいちゃんは、

「石があるから土が保温され、甘い作物が穫れる。」

と言っています。

「ノボウ土の畑とは違うおいしい物が穫れる。」

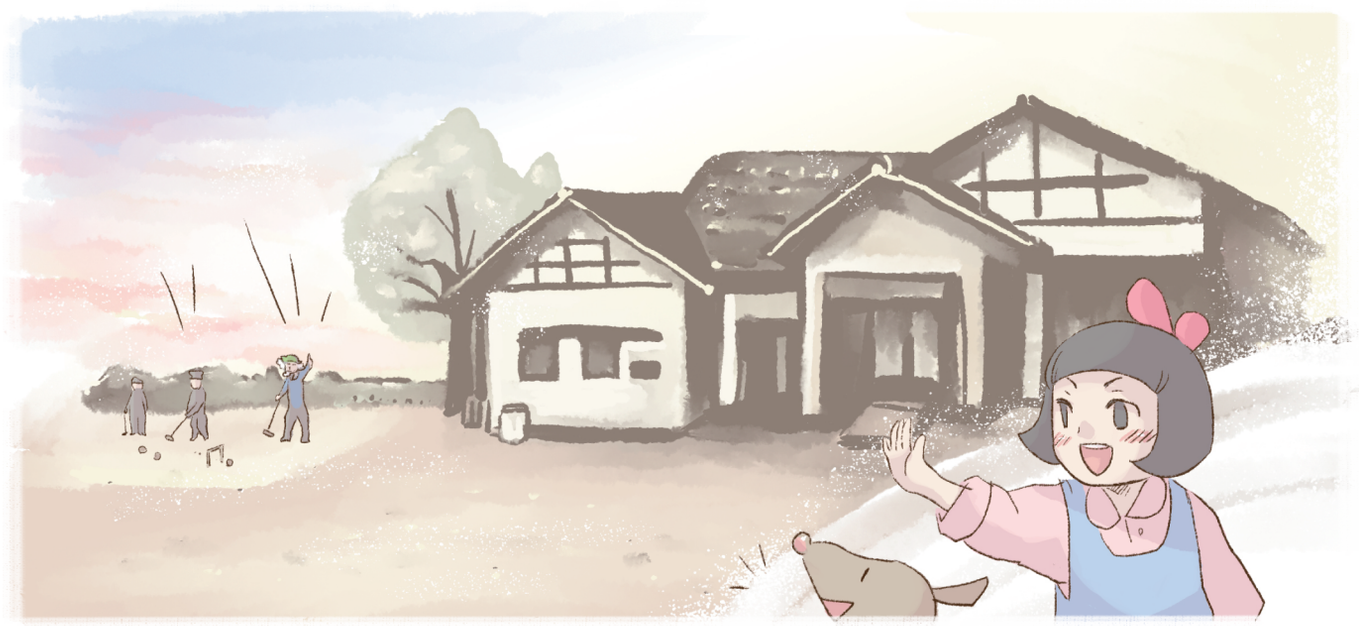
と自慢しています。

※ノボウ土とは、大昔、浅間山噴火の灰でできた黒い土のことです。

畑から多目的センターを通って鎌原観音堂の横道をまわって家に帰ることにしました。

多目的センターでは、鎌原の地区のお年寄りの人がゲートボールの練習をしていました。ここでは、十一月になると穫れたお米で誰でもが参加することのできるおむすび合戦をします。





米の国際コンクールで金賞を受賞された方のおむすびを食べることができます。新米も買うことができます。鎌原区の人も別荘地の方も県外の方も見え、おむすびを食べ合って満足し、ほほ笑みます。ここは、また、わさおばあちゃんの話の中にあったように浅間山噴火大和讃を唱える建物です。

十分ほど歩くと観音堂近くにきました。

奉仕会の人が一日のお仕事を終えて帰るところです。お客さんにお茶を出したり、天明三年浅間山噴火と鎌原村のことを語り終えたりしたところです。今日もたくさんのお客さんがみえたようです。

延命寺の発掘跡を過ぎれば、ふくちゃんの家です。昭和五十四年以降に鎌原集落の発掘調査をしました。十日ノ窪や観音堂の石段、そして延命寺の発掘もしました。天明三年当時のお寺が埋まっていました。発掘されたものは、鎌原観音堂の隣りの嬬恋郷土資料館で展示されています。

家に近づくと犬が

「ワン。」

と吠えて走り出しました。

ふくちゃんも走って家に着きました。夕焼けで鎌原の里が赤く染まっていました。



ふくちゃん豆知識

道しるべが村中の分かれ道にあります。「右　すがを　左　ぬま田　ミち」と記されています。

信州街道が江戸時代に村の中を通っていたことがわかります。また、延命寺の門碑の本体は流されましたが、欠けた一部が鎌原に流されずにありました。それを用いて道しるべにしています。

本体は吾妻川を流れ下り、東吾妻町矢倉で見つかり、鎌原に戻されました。

今は、鎌原観音堂参道入口にあります。



おわりに

天明三年の浅間山噴火にまつわるふくちゃんの家族のお話でした。ふくちゃんが住んでいる鎌原は、夏は涼しいので、別荘にたくさんの人がみえます。近くの山に登り、景色を眺めたり、美しい高山に咲く花々を見たり、牧場で遊んだりしている姿が見られます。鎌原観音堂のお客さんも増えます。鎌原で穫れたキャベツやきゅうりでおもてなしをしています。

これは全て、浅間山の恵です。恩恵を受けています。浅間山が私たちに与えてくれるものです。浅間山がなければ、この恵まれた自然はありません。でも、ほうおじいちゃんの話のように天明三年に浅間山が大きな噴火をし、大きな被害になったことは事実です。

日本は自然が豊かです。私たちは、海の幸や山の幸をたくさんいただいています。恩恵を受けています。自然から切り離されて生きていくことはできません。でも、その自然は私たちに大きな災害をもたらすことがあります。自然災害を含め、自然そのものをよく知り、自然と共に生きていくことが大切だと思います。

資料

供養と浅間山噴火大和讃

災害から三十年後の文化十年ころになると家の数も二十一軒になり、天明三年のころの倍にやっとなります。文化十二年には、大きな三十三回忌の供養を行っています。鎌原観音堂の前にその石碑が建っています。亡くなった方の戒名がびっしりと四面に一人ひとり記かれています。

「天明三癸卯歳七月八日巳下刻従
浅間山火石泥砂
押出於當村四百
七十七人流死為
菩提建立
文化十二乙亥歳七月八日」

と刻まれています。



鎌原では、天明三年の噴火で亡くなった方の供養をしてきています。

百年後明治十六（一八八三）年四月二十五日には、山崎儀平太さんの家で百回忌をしました。

百五十年後の昭和七（一九三二）年七月には、鎌原公会堂前で百五十回忌をしています。

昭和二十七（一九五二）年には、観音堂前で百七十回忌をしています。その年は十七時からNHKラジオ放送で鬼押し出し寛永寺、そして、鎌原観音堂で浅間山噴火大和讃を唱えている様子が全国に流されました。

百七十五回忌は、昭和三十二（一九五七）年に観音堂前でしました。

百八十回忌は、昭和三十七（一九六二）年観音堂前でしました。その年から伊勢崎市戸谷塚・中島との流死者供養交流が始まりました。戸谷塚和讃がその年につくられ、唱えられました。

昭和五十七（一九八二）年には、聖観音を建立して大きな二百回忌の供養祭をしました。善養寺和讃も作られました。

二百十回忌は、平成四（一九九二）年に謝恩碑を建立して、聖観音前でしています。








奉納





